

第 60 回 今このときも松江市の歴史の中のほんの一瞬

「史料編纂課」に配属が決まった時には、どんなところだろう、と疑問に思っていました。「松江市の「しりょう」を調査研究している課」との情報だけ得て、「資料？」それとも「史料？」どちらだろう？「史料」なら歴史に関係しているのだろうか。と思案しながら4月1日にやってきました。

やってきて初めてここは『松江市史』を編纂していると知りました。失礼ながら私は『松江市史』の存在を知りませんでした。

しかし昨年度、松江城が国宝になったニュースは記憶していたので、祈祷札を見つけられた方々なんだ！！と本当にビックリしました。

私はその課の中で事務を担当し、8ヶ月が経とうとしています。職員13名ほどの小さな課、でも松江市の歴史を把握しているのはこの小さな課という不思議な課です。ここの課をモデルに小説でも一本かけそうな気持ちになる、ミステリアスな雰囲気を持っています。

ミステリアスと言えるのは、小さなこの課に松江市の歴史が集積されていることもあります。城下町松江、歴史ある松江という松江市の売りとなるイメージの土台がこの課にあると感じます。土台となっているのは史料調査や、史実の確認といった地道な作業です。『松江市史』もこの土台の上に作られているのです。

土台となる史料調査は月に1回から2回行われます。筆で書かれた文書、素人の私が見たって何が書かれているかわかりません。



例え字がわかって、文字に起こすとこんな感じ。どうやら漢文を読む国語の力も必要みたいです。

石原戸次 父祖之事跡見
石原主馬記

二代目石原九左衛門弟

元祖 永田猪左衛門 本国下野
生國信濃

一美應二癸巳年正月 日不知 直政様江被召
出 于時十五歳号
石原長兵衛 二十石五人扶持被下之御近
習勤仕被仰付、存寄之儀有之付而如奉
願御暇被下之浪人仕江戸 江罷越
不 知
一延寶六戊午年十二月朔日老母為見舞御

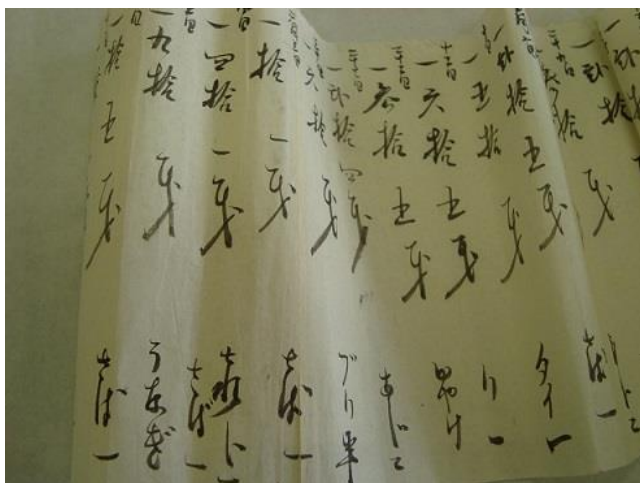
史料編纂課の大きな行事の中に「松江市史編纂委員会」があります。今年は10月6日に開催されました。編纂委員会では各部会から松江市史の事業報告があり、現在、平成23年度に史料編5「近世1」、史料編2「考古資料」を出版して以降、当初のスケジュール通り順調に出版していることが報告されました。今年度は史料編8「近現代1」を出版予定です。現在順調に校正中であることが報告されました。



来年度出版予定の別編「松江城」も現在原稿内容を整えるに至っており、市民に有効活用いただける市史を目指して、有識者の方々から指摘をいただいている段階です。

このように自治体史が順調に編纂されることは非常に稀なことです。

また『松江市史』編纂事業が始まり、松江市内・または県外に散逸していた史料が収集され、調査・翻刻が進んだことも貴重なことであると委員会の中で発言がありました。



そもそも、素人目線で考えると、散逸というより消滅してしまう気がします。こんな文書が、もし家の中から出てきたら、読めないしどうしようかな、捨てちゃおう、ともなりかねません。

「これなんだろう、どうしよう」と思った時に、「松江市史料編纂課にとりあえず連絡してみよう、調査してもらえるかも」という市民の方との連携がうまく取れているからではないかと考えます。

そのおかげか、多くの貴重な史料が市民の方々から寄せられ、松江市の歴史が集積されています。これらは地味だけど、松江市の財産だと思います。現在の暮らしがどのような編成を経てなりたっているのかが

示されると、暮らす市民として誇りが持てます。歴史というものがわれわれ市民のアイデンティティーを支えるものだからだと思います。集積された貴重な史料をまた散逸させないことも課題といえます。

現在の暮らしの充実を図る市役所の勤めの中に、時代を超えて同じ土地に暮らした人々の足跡を残す不思議な小さな課が存在する。その課も松江市史の中の小さな一つでしかない、たった今も松江市の歴史の一瞬でしかない、そんな雄大さを感じる史料編纂課です。

(平成 28 年 11 月 25 日 松江市史料編纂課 岩町紀子)